

2015年度 文学部・人間科学部
「授業に関する学生アンケート」
調査報告書

2016年 3月
文学部・人間科学部 FD委員会

目次

1. はじめに.....	2
①調査の概要.....	2
②アンケート項目.....	3
③アンケート実施状況.....	4
2. 結果.....	5
①アンケート対象者の成績分布.....	6
②各質問項目の回答結果概要.....	8
③質問項目間の相関関係.....	13
④回答者に見られる共通成分.....	14
⑤質問項目と総合評点との関係.....	15
⑥自由記述のテキスト解析.....	22
3. まとめ.....	25
①「授業に関する学生アンケート」の実施率.....	25
②学生の回答率.....	25
③学修時間の確保.....	25
④特徴的な学生のタイプ.....	26
⑤学生からの授業改善に関する要望.....	26
4. 参考文献.....	27

1. はじめに

①調査の概要

1999年秋に発足した文学部 FD委員会は、2000年度から毎年、授業に関するアンケート調査を実施し、報告書を取りまとめている。

本調査で対象となる教員は専修大学文学部および人間科学部の専任教員（特任教授、助教を含む）とし、基本的に全教員に前期・後期のいずれか1科目はアンケート調査を実施に協力してもらうよう依頼をした。アンケートを実施する科目は対象教員が担当する専門科目の中で履修者が最も多い科目を原案として提示したが、授業の実施状況を踏まえて教員からの申請があれば科目変更も可とした。

昨年度に続き専修大学ポータルサイトのアンケート機能を利用してアンケート調査を実施した。ポータルサイトを利用したアンケート実施に当たっては、文学部と人間科学部の各学科のFD委員がアンケート実施科目を取りまとめ、教務課員が全授業のアンケートフォームを作成した。

アンケートの実施期間は最終授業週から定期試験期間の2週間とし、前期は、7月18日（土）～7月31日（金）、後期は、1月14日（木）～1月27日（水）の日程でアンケート調査を実施した。

授業に関する学生アンケートのデータファイルのダウンロード、結果の集計・分析については、文学部・人間科学部教務課で行った。授業毎のアンケート集計結果は、2月3日（水）の教授会で返却し、次年度の授業改善の資料として活用していただくとともに、今年度から改善点等があればシラバスに記載してもらうこととした。また、文学部・人間科学部全体の集計と分析結果に関する報告書は3月18日（金）の教授会で配付し、後日専修大学ホームページに公開する予定としている。

②アンケート項目

「授業に関する学生アンケート」の質問項目は八木(2004)⁽¹⁾で使用されていた9つの項目(Q1～Q9)に2つの独自項目(Q10、Q11)を加えた計13項目を使用した。この内、〈出席状況〉〈自主的学習〉〈一週間の学習時間〉で学生自身の取り組み状況について、〈明解さ〉〈体系性〉〈知的魅力〉〈有益度〉〈シラバスと授業内容〉で授業内容について、〈理解度への配慮〉〈自発的学習の促進〉〈教員の熱意〉で教員の配慮・姿勢についてそれぞれ回答させた。加えて自由記述を2項目設定しQ12で授業を受けて有益だった点、Q13で授業をより良くするための意見を任意で記入させた。

アンケートは5件法で回答させ、Q1～Q10は〈5 あてはまる〉〈4 どちらかといえばあてはまる〉〈3 どちらともいえない〉〈2 どちらかといえばあてはまらない〉〈1 あてはまらない〉を選択肢とし、〈一週間の学習時間〉については〈4時間以上〉〈3時間程度〉〈2時間程度〉〈1時間程度〉〈全くしていない〉を選択肢として回答させた。

・「授業に関する学生アンケート」質問項目

No.	項目	
Q1	授業にはほとんど出席し、積極的に参加した。	〈出席状況〉
Q2	この授業のために自主的に学習した。	〈自主的学習〉
Q3	この授業はわかりやすかった。	〈明解さ〉
Q4	授業内容は体系的であり、よくまとまっていた。	〈体系性〉
Q5	この授業は知的魅力(面白さ)のあるものであった。	〈知的魅力〉
Q6	この授業は自分の学習にとって有益だった。	〈有益度〉
Q7	学生の理解度や反応に配慮した授業の進め方がなされていた。	〈理解度への配慮〉
Q8	自発的に学習・探求するための指針や助言をこの授業から得ることができた。	〈自発的学習の促進〉
Q9	授業に対する教員の熱意を感じた。	〈教員の熱意〉
Q10	この授業の内容はシラバスと一致していた。	〈シラバスと授業内容〉
Q11	この授業のために授業外に学修した時間(一週間平均)	〈一週間の学習時間〉
Q12	この授業を受けて有益だった点があれば書いてください。	〈自由記述〉
Q13	授業をより良くするために工夫できることがあれば書いてください。	〈自由記述〉

③アンケート実施状況

本アンケート調査の実施対象者である専修大学文学部および人間科学部の専任教員（特任教授および助教を含む）は合計 110 名であり、この内 104 名がアンケート調査を実施し、実施率は 94.55%となった。また科目ベースでの実施数は 186 科目となり、多くの教員が前期・後期ともにアンケート調査を実施していた。

アンケートを実施した科目の全履修数は計 17,473 件にのぼり、この内 15.86%にあたる 2772 件の回答が得られた。回答者を在学年次別に見てみると 1～2年次の回答数が多く、3年次以上の学生の回答は少なかった。

・「授業に関する学生アンケート」実施状況

	前期	後期	合計
対象教員数	110	109	110
実施教員数	82	97	104
実施率	74.55%	88.99%	94.55%
実施科目数	84	102	186
アンケート対象者数	8228	9245	17473
アンケート回答数	1779	993	2772
回答率	21.62%	10.74%	15.86%

・「授業に関する学生アンケート」回答者

	1年次	2年次	3年次	4年次	5年次以上	合計
日本語学科	38	42	24	4		108
日本文学文化学科	136	101	41	4		282
英語英米文学科	15	255	104	21	3	398
哲学科	83	31	31	5		150
歴史学科	187	115	82	11	3	398
環境地理学科	46	28	33			107
人文・ジャーナリズム学科	137	79	35	3		254
心理学科	15	60	9	4	2	90
社会学科	295	267	189	26	7	784
経済学科	30	12	5	2		49
国際経済学科	16	6	1	1		24
法学部			1			1
経営学部	14	20	3	2		39
マーケティング学科	18	30	2	5		55
会計学科		1	1			2
ネットワーク情報学部	5	7	11	7	1	31
総計	1035	1054	572	95	16	2772

2. 結果

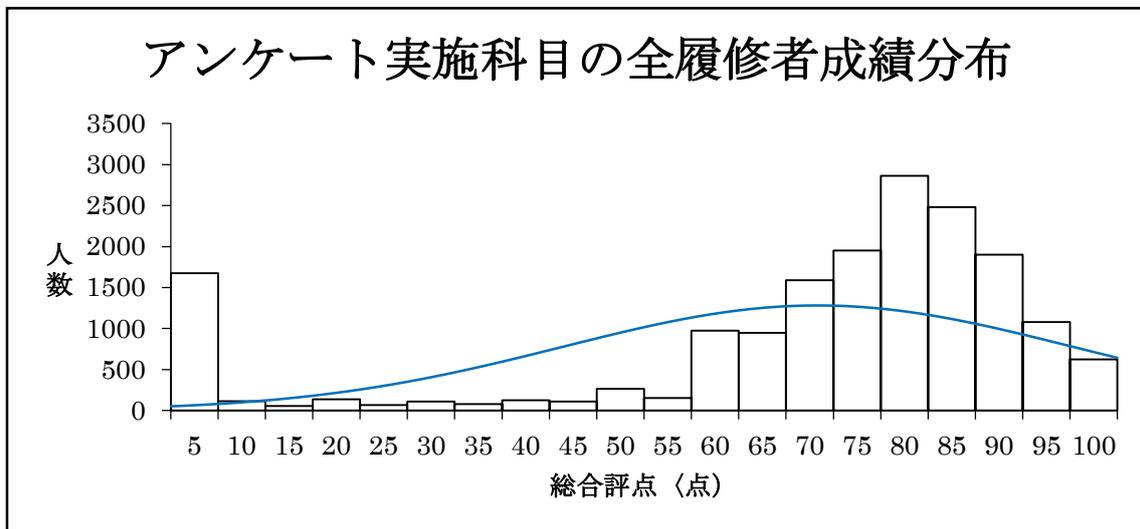
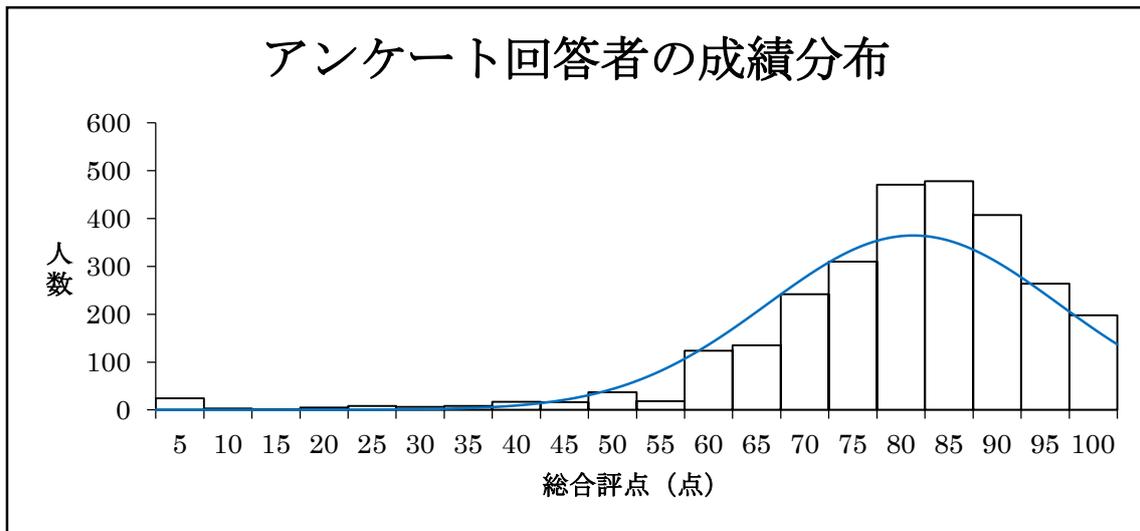
アンケート結果のデータは5段階で得点化し、回答者の最終的な成績評価となる総合評点（0～100点）を回答ごとに付加した。このデータに対して以下の6つの解析を行った。

- ① アンケート対象者の成績分布
アンケート回答者に、アンケート実施科目履修者全体と比べて偏りがいないか両者の成績分布から検討。
- ② 各質問項目の回答結果概要
各質問項目の回答状況を示し、質問ごとの特徴を検討。
- ③ 質問項目間の相関関係
スピアマンの順位相関係数(ρ)を算出し、質問項目間の関係性を検討。
- ④ 回答者に見られる共通成分
主成分分析を実施し、回答者に共通して見られる成分を検討。
- ⑤ 質問項目と総合評点との関係
質問項目がどの程度成績に影響しているのか、重回帰分析、授業ごとの学習時間と総合評点の相関係数、マルチレベル相関係数、階層線形モデルを用いて検討。
- ⑥ 自由記述のテキストデータ解析
形態素解析を実施し、語彙の出現率から「良かった点」を記述している Q12 と、「もっと工夫して欲しい点」を記述している Q13 に見られる特徴を検討。

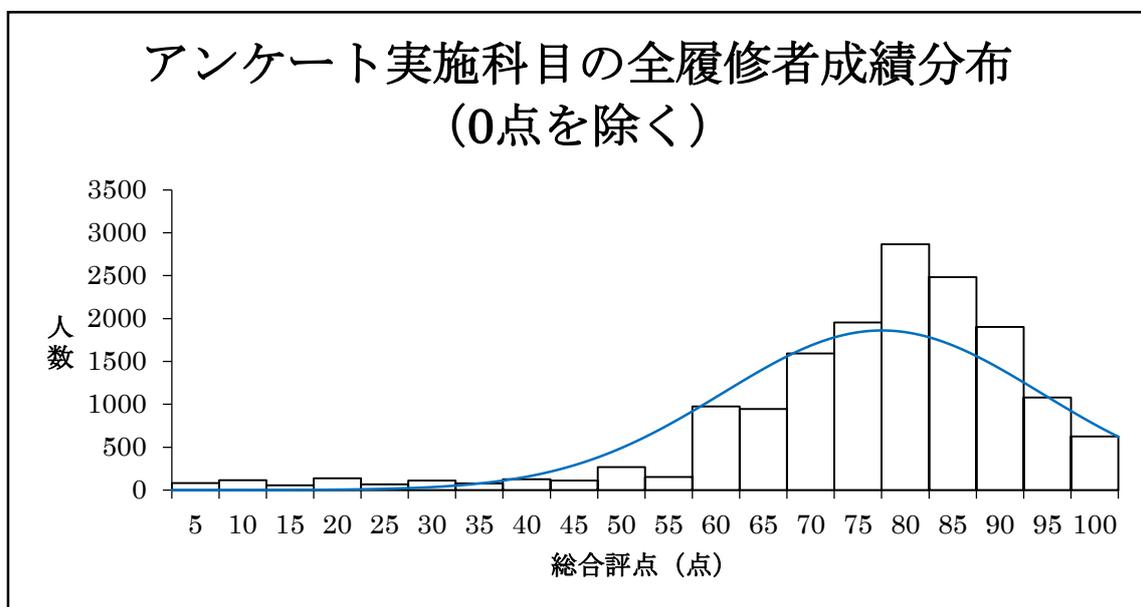
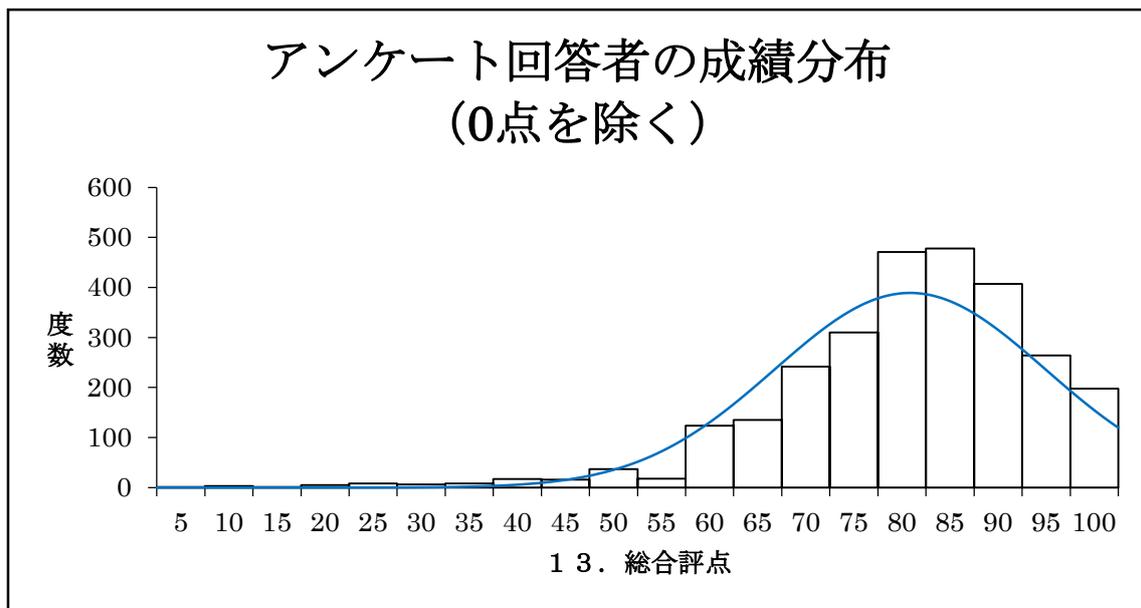
なお、これらの解析には HAD Version15.00⁽²⁾ を使用した。

① アンケート対象者の成績分布

アンケートに回答した学生の平均点は 78.8 点 (SD=15.16, n=2772) であるのに対してアンケート対象科目全履修者の平均点は 68.35 点 (SD=26.95, n=17473) であった。成績分布のグラフを見ると、アンケートに回答した学生はアンケート対象科目全履修者に比べ、0～5 点の学生が少ない。つまり、本アンケート調査の結果には実質的に授業に参加していないと思われる学生の回答はほとんど含まれておらず、しっかりと授業を受けた上で回答している学生が多数であると言える。



さらに、実質的に授業に参加していないと思われる学生を除いた場合の成績に違いがあるかを検討するため、両群ともに総合評点が 0 点の学生をすべて除き同様の計算を行ったところ、アンケートに回答した学生の平均点は 79.4 点 (SD=13.39, n=2749)、アンケート対象科目全履修者の平均点は 75.3 点 (SD=16.70, n=15716) となり、本アンケートの回答者は全履修者に比べ総合評点がやや高かった。



②各質問項目の回答結果概要

毎年、独自に設定できる質問項目として Q10 および Q11 を設定しているが、今年度は Q10〈シラバスと授業内容〉の文言修正を行い、Q11 を昨年度までの〈授業環境〉を問う項目から〈一週間の学修時間〉を問う項目に設問を変更した。

この内、〈シラバスと授業内容〉については、質問文を昨年度までの「シラバスを讀んでこの授業を履修した」から「この授業の内容はシラバスと一致していた」に変更した。その結果ポジティブな回答の割合が増加し、ネガティブな回答の割合が低下した。ほとんどの授業でシラバスの内容通りに授業が進められていることが窺える。

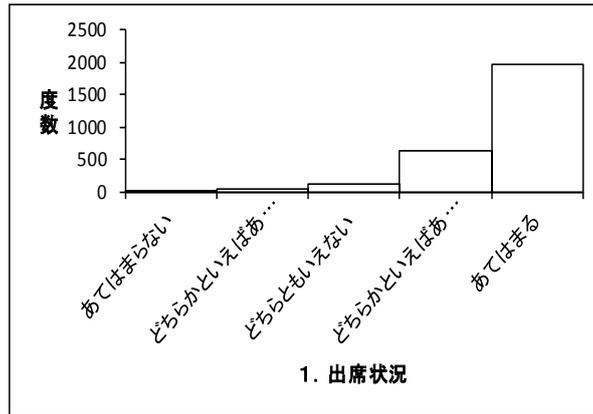
次に、新設した質問項目である、〈一週間の学習時間〉であるが、大学設置基準代二十一条 2 項によれば大学において必要とされる学修時間は「一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする。」と定められている。したがって半期 2 単位の講義科目では 90 時間の学修を必要とすることになる。通常、授業内での学修時間は一コマ 90 分の授業を 2 時間とみなし×15 回の授業で計 30 時間として計算され、残りの 60 時間分は授業外で学修時間を確保することが求められている。この 60 時間を 15 週で割ると、一つの授業に対して一週間当たり 4 時間の学修時間が必要になる計算となるが、回答結果で 4 時間以上の学修をした学生は 5.6%に留まった。中央教員審議会の学士課程に関するに各種答申では、この学修時間の確保が強く要請されており、大学として今後も何らかの対策を講じていく必要がある。

その他の項目については昨年度と同様の質問項目であり、大きな分布の変化は見られなかった。以下に各質問項目の度数分布とヒストグラムを示す。

1. 出席状況

出現値	度数	比率(%)	累積比率
あてはまらない	23	0.83	0.83
どちらかといえばあてはまらない	48	1.73	2.56
どちらともいえない	127	4.58	7.14
どちらかといえばあてはまる	623	22.47	29.62
あてはまる	1951	70.38	100.00
合計	2772	100	

Q1 授業にはほとんど出席し、積極的に参加した。

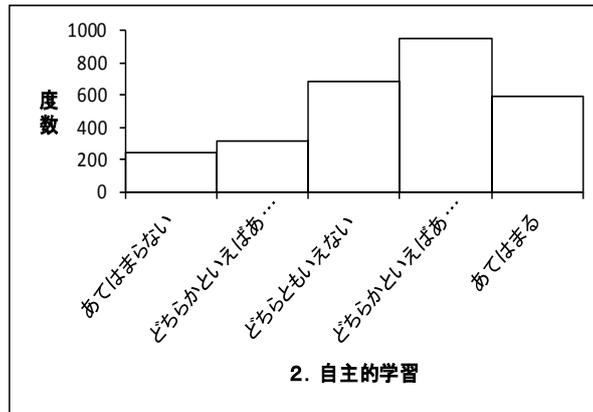


平均値 4.598 歪度 -2.248 正規性 0.412
 標準偏差 0.732 尖度 5.828 補正p値 .000

2. 自主的学習

出現値	度数	比率(%)	累積比率
あてはまらない	242	8.73	8.73
どちらかといえばあてはまらない	315	11.36	20.09
どちらともいえない	682	24.60	44.70
どちらかといえばあてはまる	947	34.16	78.86
あてはまる	586	21.14	100.00
合計	2772	100	

Q2 この授業のために自主的に学習した。

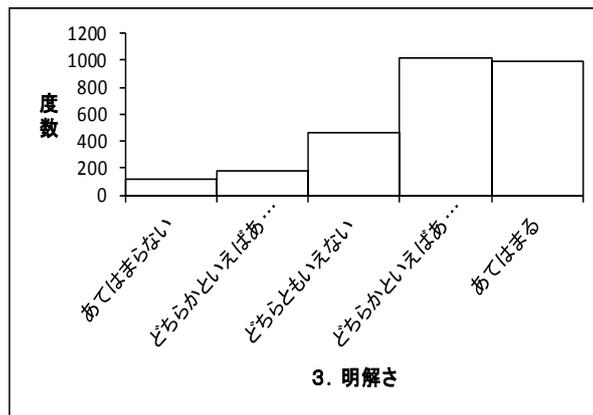


平均値 3.476 歪度 -0.542 正規性 0.223
 標準偏差 1.193 尖度 -0.531 補正p値 .000

3. 明解さ

出現値	度数	比率(%)	累積比率
あてはまらない	114	4.11	4.11
どちらかといえばあてはまらない	184	6.64	10.75
どちらともいえない	461	16.63	27.38
どちらかといえばあてはまる	1017	36.69	64.07
あてはまる	996	35.93	100.00
合計	2772	100	

Q3 この授業はわかりやすかった。

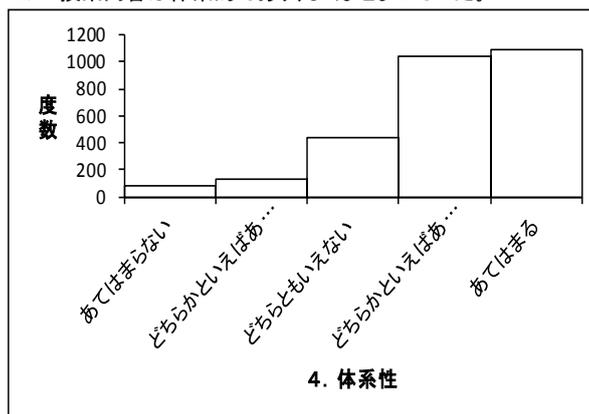


平均値 3.937 歪度 -0.988 正規性 0.250
 標準偏差 1.076 尖度 0.423 補正p値 .000

4. 体系的性

出現値	度数	比率(%)	累積比率
あてはまらない	86	3.10	3.10
どちらかといえばあてはまらない	131	4.73	7.83
どちらともいえない	435	15.69	23.52
どちらかといえばあてはまる	1034	37.30	60.82
あてはまる	1086	39.18	100.00
合計	2772	100	

Q4 授業内容は体系的であり、よくまとまっていた。

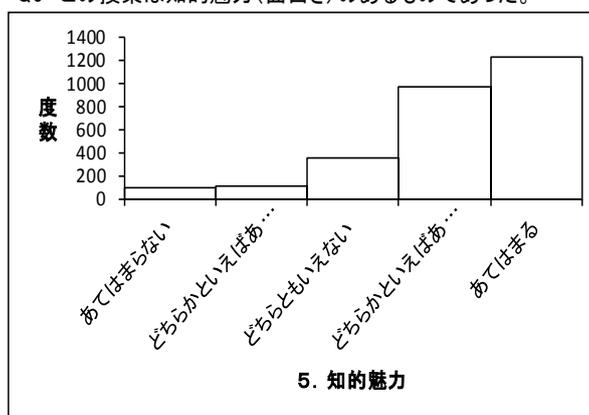


平均値 4.047 歪度 -1.101 正規性 0.246
標準偏差 1.008 尖度 0.905 補正p値 .000

5. 知的魅力

出現値	度数	比率(%)	累積比率
あてはまらない	103	3.72	3.72
どちらかといえばあてはまらない	116	4.18	7.90
どちらともいえない	359	12.95	20.85
どちらかといえばあてはまる	973	35.10	55.95
あてはまる	1221	44.05	100.00
合計	2772	100	

Q5 この授業は知的魅力(面白さ)のあるものであった。

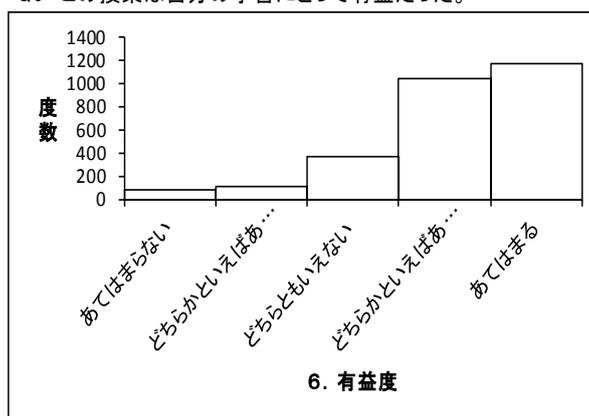


平均値 4.116 歪度 -1.283 正規性 0.247
標準偏差 1.029 尖度 1.299 補正p値 .000

6. 有益度

出現値	度数	比率(%)	累積比率
あてはまらない	88	3.17	3.17
どちらかといえばあてはまらない	110	3.97	7.14
どちらともいえない	364	13.13	20.27
どちらかといえばあてはまる	1040	37.52	57.79
あてはまる	1170	42.21	100.00
合計	2772	100	

Q6 この授業は自分の学習にとって有益だった。

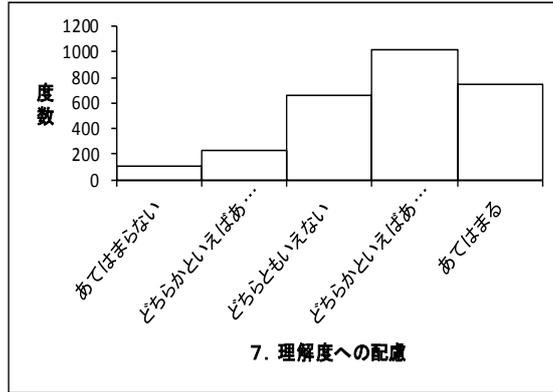


平均値 4.116 歪度 -1.259 正規性 0.251
標準偏差 0.992 尖度 1.392 補正p値 .000

7. 理解度への配慮

出現値	度数	比率(%)	累積比率
あてはまらない	112	4.04	4.04
どちらかといえばあてはまらない	232	8.37	12.41
どちらともいえない	663	23.92	36.33
どちらかといえばあてはまる	1017	36.69	73.02
あてはまる	748	26.98	100.00
合計	2772	100	

Q7 学生の理解度や反応に配慮した授業の進め方がなされていた。

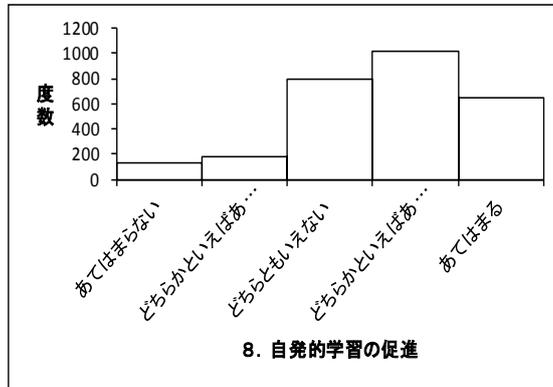


平均値 3.742 歪度 -0.681 正規性 0.232
標準偏差 1.068 尖度 -0.075 補正p値 .000

8. 自発的学習の促進

出現値	度数	比率(%)	累積比率
あてはまらない	133	4.80	4.80
どちらかといえばあてはまらない	185	6.67	11.47
どちらともいえない	798	28.79	40.26
どちらかといえばあてはまる	1011	36.47	76.73
あてはまる	645	23.27	100.00
合計	2772	100	

Q8 自発的に学習・探求するための指針や助言をこの授業から得るこ

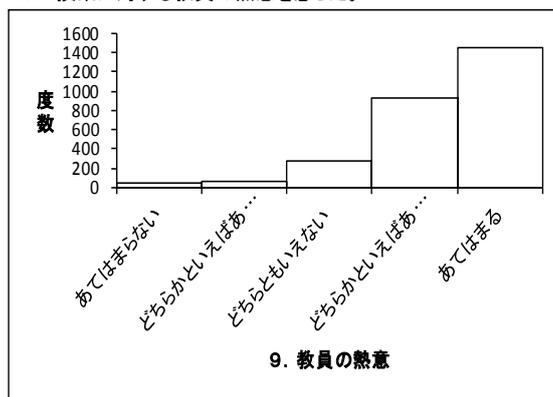


平均値 3.667 歪度 -0.635 正規性 0.221
標準偏差 1.053 尖度 0.045 補正p値 .000

9. 教員の熱意

出現値	度数	比率(%)	累積比率
あてはまらない	50	1.80	1.80
どちらかといえばあてはまらない	54	1.95	3.75
どちらともいえない	278	10.03	13.78
どちらかといえばあてはまる	931	33.59	47.37
あてはまる	1459	52.63	100.00
合計	2772	100	

Q9 授業に対する教員の熱意を感じた。

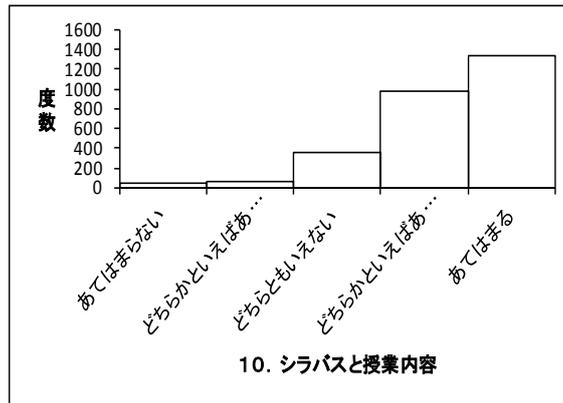


平均値 4.333 歪度 -1.536 正規性 0.305
標準偏差 0.870 尖度 2.655 補正p値 .000

10. シラバスと授業内容

出現値	度数	比率(%)	累積比率
あてはまらない	38	1.37	1.37
どちらかといえばあてはまらない	59	2.13	3.50
どちらともいえない	363	13.10	16.59
どちらかといえばあてはまる	977	35.25	51.84
あてはまる	1335	48.16	100.00
合計	2772	100	

Q10 この授業の内容はシラバスと一致していた。

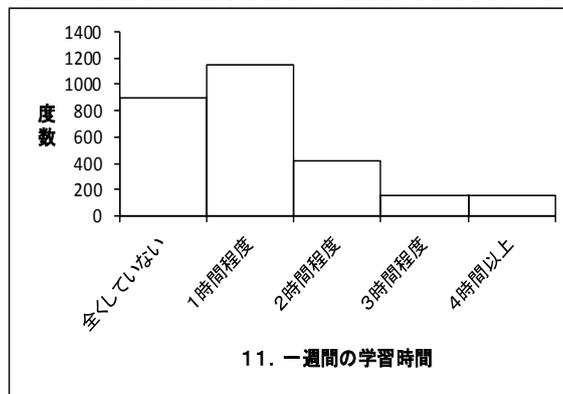


平均値 4.267 歪度 -1.247 正規性 0.283
 標準偏差 0.866 尖度 1.633 補正p値 .000

11. 一週間の学習時間

出現値	度数	比率(%)	累積比率
全くしていない	903	32.58	32.58
1時間程度	1145	41.31	73.88
2時間程度	414	14.94	88.82
3時間程度	155	5.59	94.41
4時間以上	155	5.59	100.00
合計	2772	100	

Q11 この授業のために授業外に学修した時間(一週間平均)



平均値 2.103 歪度 1.085 正規性 0.276
 標準偏差 1.092 尖度 0.696 補正p値 .000

③質問項目間の相関関係

質問項目間の相関関係を確かめるために、全質問間でスピアマンの順位相関係数 (ρ) を算出した。〈明解さ〉、〈体系性〉、〈知的魅力〉、〈有益度〉、〈理解度への配慮〉、〈自発的学習の促進〉、〈教員の熱意〉の間で比較的強い相関が見られた。一方、総合評点は各質問項目との相関が比較的弱く、特に、〈一週間の学習時間〉とは全項目間で唯一、有意な相関が見られなかった。

・ 質問項目間の相関係数 (ρ)

	1. 出席状況	2. 自主的学習	3. 明解さ	4. 体系性	5. 知的魅力	6. 有益度	7. 理解度への配慮	8. 自発的学習の促進	9. 教員の熱意	10. シラバスと授業内容	11. 一週間の学習時間	12. 総合評点
1. 出席状況	1.000											
2. 自主的学習	0.272 **	1.000										
3. 明解さ	0.159 **	0.323 **	1.000									
4. 体系性	0.197 **	0.302 **	0.704 **	1.000								
5. 知的魅力	0.192 **	0.317 **	0.642 **	0.580 **	1.000							
6. 有益度	0.189 **	0.340 **	0.586 **	0.523 **	0.678 **	1.000						
7. 理解度への配慮	0.124 **	0.275 **	0.569 **	0.548 **	0.517 **	0.480 **	1.000					
8. 自発的学習の促進	0.182 **	0.422 **	0.515 **	0.494 **	0.521 **	0.539 **	0.542 **	1.000				
9. 教員の熱意	0.231 **	0.227 **	0.411 **	0.425 **	0.460 **	0.420 **	0.440 **	0.440 **	1.000			
10. シラバスと授業内容	0.178 **	0.172 **	0.343 **	0.428 **	0.300 **	0.328 **	0.337 **	0.291 **	0.367 **	1.000		
11. 一週間の学習時間	0.120 **	0.449 **	0.154 **	0.163 **	0.143 **	0.195 **	0.123 **	0.247 **	0.116 **	0.094 **	1.000	
12. 総合評点	0.238 **	0.090 **	0.158 **	0.112 **	0.186 **	0.199 **	0.138 **	0.157 **	0.140 **	0.068 **	-0.014	1.000

** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

④回答者に見られる共通成分

質問項目の結果に対して主成分分析を行った。固有値を1以上とすると2つの成分が得られるが、3つ目の固有値は0.92と1に近い値であったため、これを加えた3つの主成分（Factor）を抽出した。これら3つの主成分で累計寄与率は66.03%となる。それぞれ3つの主成分は八木（2004）⁽¹⁾と同様の結果となった。すなわち、第1主成分は「3. 明解さ」から「10. シラバスと授業内容との整合性」までの8つの項目から構成される授業の質に対する全体的な評価を反映する変数群、第2主成分は「11. 一週間の学習時間」と「2. 自主的に学習した」の2つの項目から構成される学生自身の授業外学習の程度を表す変数群、そして第3主成分は「1. 出席状況」のみから構成される学生自身の授業への出席状況を表す変数である。これら3つの変数群の相互間にあまり強い関連がないこと、つまりたとえば授業の質を高く評価している学生ほど授業外学習を多くしていたり、出席状況のよい学生ほど授業外学習も多くしていたりするとは限らないこと、に注意が必要であろう。

・スクリープロットと主成分分析の結果

	固有値	累積寄与
Factor1	5.07	46.08
Factor2	1.27	57.62
Factor3	0.93	66.03
Factor4	0.79	73.18
Factor5	0.61	78.70
Factor6	0.55	83.74
Factor7	0.50	88.27
Factor8	0.44	92.23
Factor9	0.37	95.58
Factor10	0.25	97.86
Factor11	0.24	100.00

項目	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
3. 明解さ	0.83	-0.16	-0.12	0.73
5. 知的魅力	0.83	-0.14	-0.08	0.72
4. 体系性	0.82	-0.14	-0.02	0.69
6. 有益度	0.80	-0.06	-0.08	0.66
8. 自発的学習の促進	0.76	0.08	-0.12	0.60
7. 理解度への配慮	0.76	-0.18	-0.13	0.63
9. 教員の熱意	0.69	-0.14	0.18	0.53
10. シラバスと授業内容	0.54	-0.14	0.32	0.41
11. 一週間の学習時間	0.28	0.75	-0.32	0.74
2. 自主的学習	0.51	0.65	-0.07	0.68
1. 出席状況	0.33	0.38	0.79	0.88

⑤質問項目と総合評点との関係

ここでは各質問項目が最終的な成績評価である総合評点へどのような影響を与えているかを検討する。

まず、アンケート回答から各質問項目が総合評点へどのような影響を与えているかを検討するために、重回帰分析を用いた分析を試みた。当初、総合評点を目的変数、すべての質問項目を説明変数としたが、上述の相関係数を見ても分かるように質問間の相関係数の高い質問グループがあり、説明変数間に多重共線性（VIF > 2）が確認されたため、ステップワイズ法により説明変数を選択した。その結果、〈出席状況〉〈有益度〉〈教員の熱意〉〈一週間の学修時間〉〈自発的な学習の促進〉の5項目が得られ、これら5項目を説明変数として使用した。

その結果、〈出席状況〉の係数および t 値が最も大きかった。出席状況が大きな係数をとった理由としては、実際の成績評価基準の一部として用いられていることが考えられる。また、その他のすべての項目で t 値の絶対値が2を超えており、総合評点への影響があることが確認された。

変数名	係数	標準誤差	95% 下限	95% 上限	df	t 値	p 値
切片	41.964	2.011	38.020	45.908	2742	20.865	.000
1. 出席状況	5.219	0.382	4.471	5.968	2742	13.670	.000 **
6. 有益度	1.921	0.346	1.242	2.599	2742	5.548	.000 **
9. 教員の熱意	0.812	0.372	0.081	1.542	2742	2.179	.029 *
11. 一週間の学習時間	-0.761	0.254	-1.258	-0.263	2742	-2.999	.003 **
8. 自発的な学習の促進	0.807	0.329	0.162	1.453	2742	2.452	.014 *

変数名	13. 総合評点	95% 下限	95% 上限	VIF
1. 出席状況	.254 **	0.218	0.291	1.083
6. 有益度	.127 **	0.082	0.171	1.629
9. 教員の熱意	.047 *	0.005	0.089	1.447
11. 一週間の学習時間	-.055 **	-0.091	-0.019	1.059
8. 自発的な学習の促進	.056 *	0.011	0.102	1.659
R^2	.124 **			

ところで上記の分析結果の回帰係数に着目すると、〈出席状況〉〈有益度〉〈教員の熱意〉〈自発的な学習の促進〉の符号は正であり順当な結果に見えるが、〈一週間の学修時間〉のみは符号が負になっている。これは「授業外学習を多くしている学生ほど成績が悪い」という、一見不思議な結果である。〈一週間の学修時間〉と〈総合評点〉との関係をめぐっては、上述の2変数間相関においても-0.014とほぼ無相関に近く、実際有意でなかった。常識的には「授業外学習を多くしている学生ほど成績がよい」という関係が成り立ってほしいところ

であるにもかかわらず、これら2つの結果はいずれもその予想に反している。

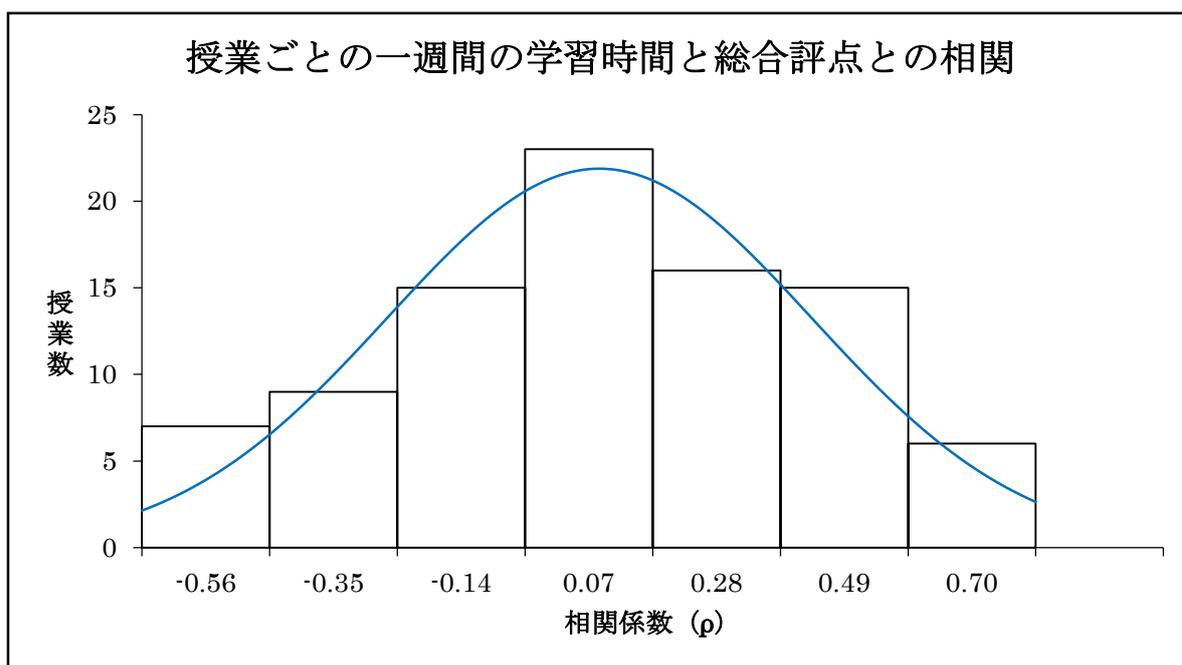
この結果に対するひとつの仮説として、授業ごとの難易度や評価基準に違いがあるのではないかということが考えられる。つまり、難易度が高い授業ではしっかりと学修時間を確保し課題等に取り組む必要があるが、いわゆる「楽勝科目」などと比べると評点が低くなるという可能性である。

もしこの仮説が正しかった場合、授業同士の比較における「授業外学習を実際に多く必要とする授業ほど成績評価の平均点が低い」という傾向自体は、一概に悪いこととはいえない。もちろん、教員の授業に対する姿勢が不適切であることを意味するいわゆる「楽勝科目」の多さがその原因なのであれば問題であるが、一般には成績評価の基準は個々の授業のカリキュラム上の位置づけや特性に応じて多様でありうるからである。

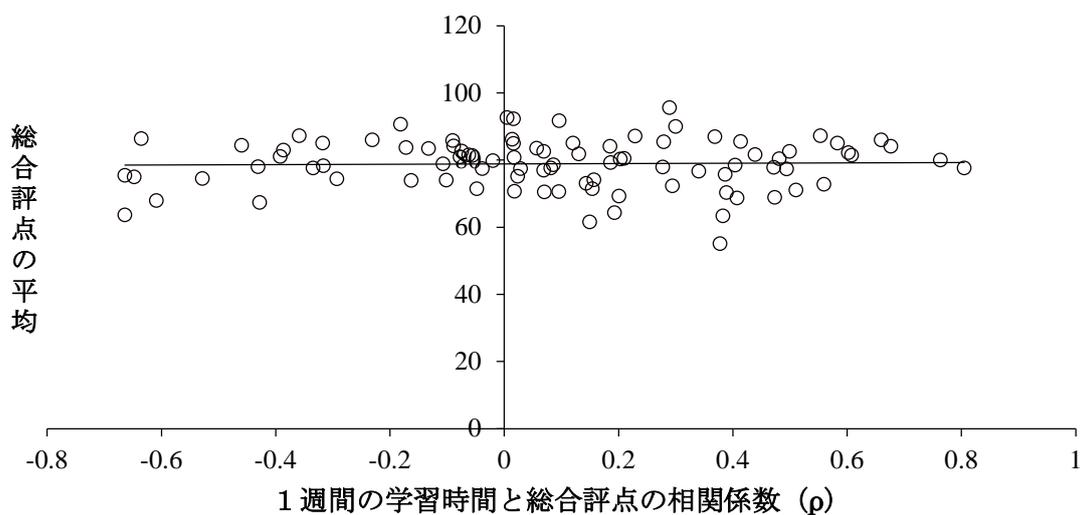
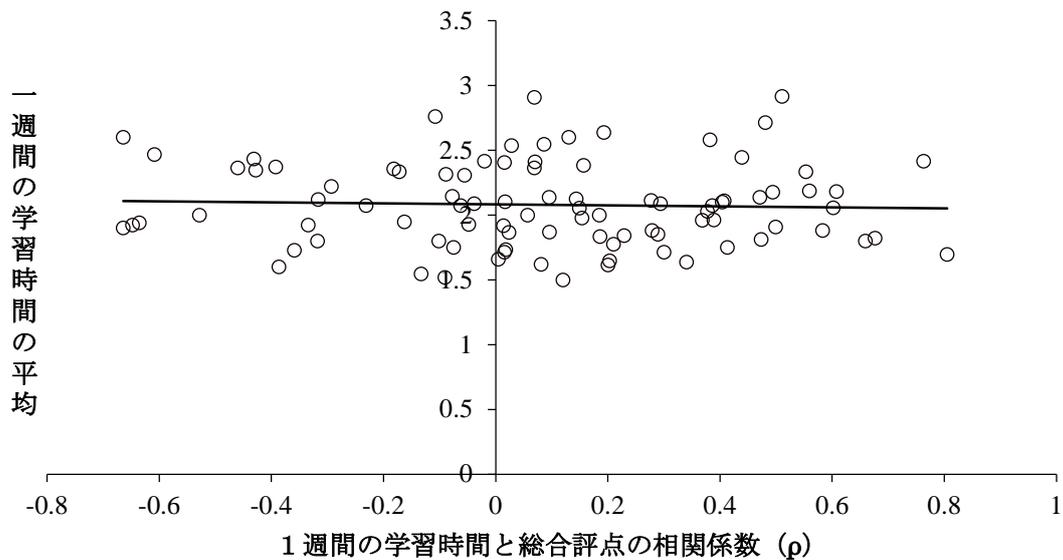
FD 活動上詳細な検討を要するのは、むしろ個々の授業の内部での、個人レベルでの〈一週間の学習時間〉と〈総合評点〉との関係がどうなっているのかであろう。これらが全体として正の相関を有しているのであれば、つまり①「それぞれの授業の履修者の中で、授業外学習を多くする学生ほど成績がよい」傾向がみられるのであれば、授業外学習の促進という趣旨には適っている。一方、②「各授業内部の履修者個人レベルでこの2変数に関連が見られない」場合や、逆に③「各授業内部の履修者個人レベルでこの2変数に負の相関が観察される」場合は問題かもしれない。

そこで、個々の授業の内部での個人レベルでの関連を精査するために、回答者数が10人未満の授業を除外し、集団(=授業)ごとの〈一週間の学習時間〉と〈総合評点〉との順位相関係数(ρ)を算出した。その結果、対象となった授業の相関係数の平均は0.09($SD=0.35$, $n=91$)であった。これはほぼ0に近い値であり、上述の3つの可能性の中では「(文学部・人間科学部で開講されているこの分析の対象となった91科目の授業を全体として見ると)それぞれの授業の履修者の中で、授業外学習を多くするかどうかと成績との間には関連がない」に相当する結果である。

さらに、個々の授業ごとの相関係数の分布を詳しく見ると、以下に示すヒストグラムからもわかるように、その分布はほぼ正規分布に近似しうるものであり、標準偏差も0.35と決して小さくはない値であった。つまり、(i) 授業内部の履修者レベルで授業外学習と成績がどのように関連するかについては授業間の多様性が大きく、(ii) 「授業外学習をどのくらいするかと成績とがほとんど関連しない」授業が相対的に大きな比率を占める一方で、(iii) 「授業外学習を多くする学生ほど成績もよい」授業と「授業外学習を多くする学生ほど成績が悪い」授業が互いに同じくらいの比率で存在するということになる。



そこで、授業外学習と成績との間に正の関連が見られる授業と負の関連が見られる授業とがそれぞれどのような特徴を持っているのかをさらに探るために、授業ごとの履修者レベルでの〈一週間の学習時間〉と〈総合評点〉との相関係数と、その授業の〈一週間の学習時間〉の平均や〈総合評点〉の平均との散布図を作成してみた。残念ながら、いずれの図からも、これらの間には明確な関連は見られないと判断できる。つまり、たとえば「(難易度が高いなど科目特性上の理由で) 平均点が低い科目ほど、履修者個人レベルでは授業外学習を多くするほど成績がよくなる」といった傾向はみられないということである。よって、授業外学習と成績との間に正の関連が見られる授業と負の関連が見られる授業との間に、これらとは別の何らかの統計的傾向性が存在するのか、単純にランダムに分布しているのかを確かめることは、次年度以降の検討課題とせざるを得ないだろう。



いずれにせよ、学習時間と総合評点とが負の相関（あるいは無相関）を持つ授業が無視できない数存在すること自体は明確な事実であるから、正の相関にシフトさせるために授業計画や予習復習のあり方、成績評価方法などを点検し、学生が効果的に学習出来るようこれらの内容を充実させていく必要があると考えられる。

なお、上で詳しく分析した〈一週間の学習時間〉に限らず、今年度のアンケート分析の最大の関心事である〈総合評点〉とアンケートへの回答との関連を正確に評価するためには、授業ごとの多様性を統制することが方法論上重要である。われわれは個々の授業内部でのこれらの関連の全体像を知りたいからである。

そこで、これまでと同様に回答者数が10人未満の授業を除いた91科目の授業について、

マルチレベル相関係数を計算した。

これまで問題にしてきた「11. 一週間の学習時間」と「13. 総合評点」との関連についていえば、個人レベル相関係数が 0.036 とほとんど無相関であるのに対して（これまでの分析と整合的）、集団レベル相関係数が -0.452 とかなり強い負の相関をもっていることから、「授業外学習を多く必要とする授業ほど成績評価の平均点が低い」という上述の仮説は正しかったことが確認できる。

マルチレベル相関分析

	1. 出席状況	2. 自主的学習	3. 明解さ	4. 体系的	5. 知的魅力	6. 有益度	7. 理解度への配慮	8. 自発的学習の促進	9. 教員の熱意	10. シラバスと授業内容	11. 一週間の学習時間	13. 総合評点
1. 出席状況	.043 **	.263 **	.184 **	.210 **	.214 **	.210 **	.111 **	.200 **	.220 **	.167 **	.118 **	.279 **
2. 自主的学習	.289	.032 **	.341 **	.307 **	.332 **	.344 **	.284 **	.410 **	.221 **	.176 **	.398 **	.103 **
3. 明解さ	.184	.322 +	.204 **	.712 **	.659 **	.597 **	.572 **	.532 **	.444 **	.348 **	.177 **	.128 **
4. 体系的	.205	.427 +	.931 **	.157 **	.609 **	.549 **	.561 **	.529 **	.446 **	.417 **	.190 **	.116 **
5. 知的魅力	.253	.243	.909 **	.795 **	.187 **	.704 **	.527 **	.547 **	.499 **	.313 **	.166 **	.142 **
6. 有益度	.159	.463 +	.923 **	.869 **	.913 **	.125 **	.496 **	.533 **	.444 **	.329 **	.193 **	.165 **
7. 理解度への配慮	.233	.182	.892 **	.856 **	.900 **	.852 **	.127 **	.550 **	.469 **	.350 **	.162 **	.095 **
8. 自発的学習の促進	.320 +	.597 **	.835 **	.764 **	.844 **	.967 **	.819 **	.090 **	.449 **	.321 **	.236 **	.135 **
9. 教員の熱意	.291 +	.135	.740 **	.708 **	.861 **	.739 **	.819 **	.733 **	.113 **	.415 **	.145 **	.126 **
10. シラバスと授業内容	.303 +	-.014	.549 **	.727 **	.402 **	.448 **	.505 **	.334 *	.474 **	.092 **	.109 **	.091 **
11. 一週間の学習時間	-.108	.832 **	-.060	-.011	-.223	-.009	-.289 +	.159	-.302 +	-.154	.048 **	.036 +
13. 総合評点	.121	-.170	.374 **	.271 *	.451 **	.442 **	.532 **	.511 **	.440 **	.147	-.452 **	.240 **

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

※対角行列(太字)は級内相関、上三角行列は個人レベル相関、下三角行列は集団レベル相関を表す

さらに、〈総合評点〉を従属変数とした回帰分析についても、階層線形モデル (HLM) による改訂を試みた。

その結果、〈出席状況〉および〈有益度〉の2項目が〈総合評点〉に有意な効果を与えていたが、その他の項目に有意な効果は見られなかった。〈出席状況〉については、成績評価の際に最低限の出席を考慮している場合や出席点を加味している場合などが考えられ、これらが正の効果として表れていると考えられる。また〈有益度〉については「③質問項目間の相関関係」で、いくつかの質問項目と強い相関が見られ、HLM における多重共線性 (VIF) も 2 を超えていることから、ステップワイズ法を用いて再度分析を実施した。その結果、説明変数として上記と同じ〈出席状況〉および〈有益度〉の2項目が投入され、総合評点に対して有意な正の効果を確認された。

最初の重回帰分析と比較して注目すべきは、重回帰分析では成績に対して有意な正の効果をもっていた〈教員の熱意〉と〈自発的学習の促進〉が HLM では有意でなくなっていることである。つまり、これら2つの要因は、授業レベルでのみ成績に対して効果をもっている可能性が考えられる。つまり、「教員の熱意が高く、自発的学習をうまく促進させている授業では、そうでない授業と比べて、履修者全体の成績が高い」のであって、「個々の授業の内部で、『教員の熱意が高く、自発的学習を促している』と感じている学生ほど、そうで

ない学生に比べて成績が高い」わけではないということである。これは常識的であるとともに、望ましい結果でもあろう。

いずれにせよ、もし今後も引き続き〈総合評点〉との関連からアンケートの分析を進めるのであれば、授業レベルでの効果と履修者個人レベルでの効果を分けていくことは必要であらう。

(i) 全質問項目を説明変数として投入した場合の階層線形モデル

固定効果

従属変数 = 13. 総合評点 (授業数=91, n=2340)

変数名	係数	標準誤差	95%下限	95%上限	df	t値	p値
切片	79.051	0.798	77.467	80.635	92	99.117	.000 **
1. 出席状況	4.667	0.625	3.442	5.892	2236	7.471	.000 **
2. 自主的学習	-0.059	0.283	-0.615	0.497	2236	-0.207	.836
3. 明解さ	0.328	0.390	-0.437	1.094	2236	0.841	.400
4. 体系性	-0.355	0.418	-1.175	0.464	2236	-0.850	.395
5. 知的魅力	0.013	0.412	-0.796	0.821	2236	0.031	.976
6. 有益度	1.224	0.493	0.257	2.191	2236	2.481	.013 *
7. 理解度への配慮	-0.024	0.339	-0.689	0.641	2236	-0.070	.944
8. 自発的学習の促進	0.450	0.364	-0.263	1.164	2236	1.238	.216
9. 教員の熱意	0.284	0.416	-0.531	1.100	2236	0.684	.494
10. シラバスと授業内容	0.099	0.408	-0.701	0.899	2236	0.243	.808
11. 一週間の学習時間	-0.236	0.236	-0.699	0.227	2236	-0.998	.319

※説明変数はすべて集団平均で中心化。

※頑健標準誤差を用いた。

近似標準化係数

従属変数 = 13. 総合評点

変数名	13. 総合評点	VIF
1. 出席状況	.216 **	1.129
2. 自主的学習	-.004	1.448
3. 明解さ	.021	2.613
4. 体系性	-.022	2.437
5. 知的魅力	.001	2.638
6. 有益度	.075 *	2.255
7. 理解度への配慮	-.002	1.875
8. 自発的学習の促進	.030	1.899
9. 教員の熱意	.015	1.608
10. シラバスと授業内容	.005	1.334
11. 一週間の学習時間	-.016	1.203
R^2	.067	

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

(ii) ステップワイズ法により決定された説明変数を投入した場合の階層線形モデル

固定効果

従属変数 = 13. 総合評点 (授業数=91, n=2340)

変数名	係数	標準誤差	95% 下限	95% 上限	df	t 値	p 値
切片	79.051	0.798	77.466	80.635	92	99.114	.000 **
1. 出席状況	4.716	0.631	3.479	5.953	2245	7.474	.000 **
6. 有益度	1.539	0.405	0.745	2.333	2245	3.802	.000 **

※説明変数はすべて集団平均で中心化。

※頑健標準誤差を用いた。

近似標準化係数

従属変数 = 13. 総合評点

変数名	13. 総合評点	VIF
1. 出席状況	.219 **	1.046
6. 有益度	.095 **	1.046
R^2	.066	

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

⑥自由記述のテキスト解析

次に自由記述項目である Q12 および Q13 について形態素解析を行った。各項目から得られた自由記述のテキストデータは Web ブラウザから形態素解析エンジン MeCab で日本語形態素解析が行える「WEB 茶まめ」を使用した。得られた語彙素から助詞や補助記号など不要な品詞を除いて各質問項目での出現数(i)を算出した。その後、各質問項目で出現数(i)が 10 以上の語彙素を抽出し、全語彙素数(x)に対するある語彙素の出現率(P)を算出した。さらに質問項目ごとのある語彙素の出現率 (P) から項目間の出現比率 (R) を求め、両質問項目それぞれから見た出現比率 (Ra および Rb)の高い語彙素から順番に 40 位までを抽出した。また、一方の項目にのみ現れた語彙素についても抽出した。

自由記述データに対する語彙素の出現比率算出方法

	Q12(A)	Q13(B)
質問項目ごとの全語彙素数(x)	$A_x=2641$	$B_x=2339$
ある語彙素の出現数(i) (出現数 ≥ 10)	A_i	B_i
ある語彙素の出現率(P)	$(P_a)=A_i/A_x$	$(P_b)=B_i/B_x$
ある語彙素の出現比率 (R)	$(R_a)=(P_a)/(P_b)$	$(R_b)=(P_b)/(P_a)$

Q12(A)からは「社会」「世界」「得る」「知識」などの項目が高い出現比率を示した。これらは「社会に出て役に立つ知識」や「世界に出て活躍する動機」などが連想され、世間一般で大学生に求められる能力と言える。また、Q12 のみに出現した語彙素からは「英語」「生活」「小説」「文学」など両学部の専門科目らしい語彙素が見られた。これは学部の特徴的な講義が学生から一定の評価を受けていることを示唆していると考えられ、これらを勘案すれば専門的知識を卒業後にも役立つ形で身につけたいという学生の要望が想像できる。このような要望に答えるべく、より良いカリキュラムの開発や学修環境の充実を進めていくことが重要である。

一方、Q13(B)からは「教室」「テスト」「プリント」「配布」などの項目が高い出現比率を示した。また Q13 のみに出現する語彙素は「板書」「スライド」「レジュメ」「パワー」などがあった。これらの語彙素からは教室環境、配付物やスライドの活用方法、テストの実施について改善して欲しいという要望が読み取れる。これらは例年の自由記述でも比較的多く見られる項目であるので、教員各個人が授業内で学生の学修ニーズを把握し、より効果的に学修ができる資料配付の方法やスライド・板書の提示方法を検討する必要がある。

・Q12での出現比率が高い語彙(40位まで)

順位	語彙素	品詞	Q12出現数(Ai)	Q13出現数(Bi)	Q12出現率(=Pa)	Q13出現率(Pb)	出現率(Ra)
1	社会	名詞-普通名詞-一般	32	1	1.21%	0.04%	28.34
2	学ぶ	動詞-一般	69	4	2.61%	0.17%	15.28
3	世界	名詞-普通名詞-一般	15	1	0.57%	0.04%	13.28
4	得る	動詞-非自立可能	14	1	0.53%	0.04%	12.40
5	勉強	名詞-普通名詞-サ変可能	13	1	0.49%	0.04%	11.51
6	さ	接尾辞-名詞的-一般	12	1	0.45%	0.04%	10.63
7	知識	名詞-普通名詞-一般	36	3	1.36%	0.13%	10.63
8	興味	名詞-普通名詞-一般	35	3	1.33%	0.13%	10.33
9	触れる	動詞-一般	11	1	0.42%	0.04%	9.74
9	沸く	動詞-一般	11	1	0.42%	0.04%	9.74
9	分野	名詞-普通名詞-一般	11	1	0.42%	0.04%	9.74
12	知る	動詞-一般	53	5	2.01%	0.21%	9.39
13	歴史	名詞-普通名詞-一般	21	2	0.80%	0.09%	9.30
14	様々	形状詞-一般	15	2	0.57%	0.09%	6.64
15	楽しい	形容詞-一般	14	2	0.53%	0.09%	6.20
16	深まる	動詞-一般	13	2	0.49%	0.09%	5.76
16	日本	名詞-固有名詞-地名-国	13	2	0.49%	0.09%	5.76
18	自分	名詞-普通名詞-一般	38	6	1.44%	0.26%	5.61
18	詳しい	形容詞-一般	19	3	0.72%	0.13%	5.61
20	面白い	形容詞-一般	29	5	1.10%	0.21%	5.14
21	沢山	副詞	11	2	0.42%	0.09%	4.87
22	深い	形容詞-一般	16	3	0.61%	0.13%	4.72
23	今	名詞-普通名詞-副詞可能	15	3	0.57%	0.13%	4.43
24	つく	動詞-一般	75	16	2.84%	0.68%	4.15
25	出来る	動詞-非自立可能	125	30	4.73%	1.28%	3.69
26	事	名詞-普通名詞-一般	216	54	8.18%	2.31%	3.54
26	考える	動詞-一般	36	9	1.36%	0.38%	3.54
28	持つ	動詞-一般	20	5	0.76%	0.21%	3.54
29	点	名詞-普通名詞-助数詞可能	28	8	1.06%	0.34%	3.10
30	学	接尾辞-名詞的-一般	31	9	1.17%	0.38%	3.05
31	増える	動詞-一般	10	3	0.38%	0.13%	2.95
31	機会	名詞-普通名詞-一般	10	3	0.38%	0.13%	2.95
33	的	接尾辞-形状詞的	38	12	1.44%	0.51%	2.80
34	問題	名詞-普通名詞-一般	15	5	0.57%	0.21%	2.66
35	迎も	副詞	38	13	1.44%	0.56%	2.59
36	他	名詞-普通名詞-副詞可能	10	4	0.38%	0.17%	2.21
37	此れ	代名詞	12	5	0.45%	0.21%	2.13
38	方	接尾辞-名詞的-一般	31	13	1.17%	0.56%	2.11
39	読む	動詞-一般	14	6	0.53%	0.26%	2.07
40	物	名詞-普通名詞-サ変可能	23	11	0.87%	0.47%	1.85

・Q12のみに出現した語彙素

語彙素	品詞	Q12出現数(Ai)	Q13出現数(Bi)
学習	名詞-普通名詞-サ変可能	20	0
英語	名詞-普通名詞-一般	18	0
有益	名詞-普通名詞-形状詞可能	14	0
小説	名詞-普通名詞-一般	12	0
イギリス-Inglez	名詞-固有名詞-地名-国	10	0
生活	名詞-普通名詞-サ変可能	10	0
ジャーナリズム-journalism	名詞-普通名詞-一般	10	0
文学	名詞-普通名詞-一般	10	0
背景	名詞-普通名詞-一般	10	0

・Q13 での出現比率が高い語彙(40位まで)

順位	語彙素	品詞	Q12出現数(Ai)	Q13出現数(Bi)	Q12出現率(=Pa)	Q13出現率(Pb)	出現率(Rb)
1	教室	名詞-普通名詞-一般	1	15	0.04%	0.64%	16.94
2	仕舞う	動詞-非自立可能	1	13	0.04%	0.56%	14.68
3	プリント-print	名詞-普通名詞-サ変可能	2	25	0.08%	1.07%	14.11
3	方	名詞-普通名詞-一般	2	25	0.08%	1.07%	14.11
5	テスト-test	名詞-普通名詞-サ変可能	2	22	0.08%	0.94%	12.42
6	配布	名詞-普通名詞-サ変可能	1	10	0.04%	0.43%	11.29
7	生徒	名詞-普通名詞-一般	2	18	0.08%	0.77%	10.16
8	もっと	副詞	4	27	0.15%	1.15%	7.62
9	纏める	動詞-一般	2	12	0.08%	0.51%	6.77
10	度	名詞-普通名詞-助数詞可能	2	11	0.08%	0.47%	6.21
11	少し	副詞	11	59	0.42%	2.52%	6.06
12	出す	動詞-非自立可能	2	10	0.08%	0.43%	5.65
13	貰う	動詞-非自立可能	3	13	0.11%	0.56%	4.89
14	回	名詞-普通名詞-助数詞可能	3	12	0.11%	0.51%	4.52
15	遣る	動詞-非自立可能	5	19	0.19%	0.81%	4.29
16	学生	名詞-普通名詞-一般	8	30	0.30%	1.28%	4.23
16	人	名詞-普通名詞-一般	4	15	0.15%	0.64%	4.23
18	時間	名詞-普通名詞-助数詞可能	6	19	0.23%	0.81%	3.58
19	課題	名詞-普通名詞-一般	4	12	0.15%	0.51%	3.39
20	話	名詞-普通名詞-サ変可能	8	21	0.30%	0.90%	2.96
21	特に	副詞	7	18	0.27%	0.77%	2.90
22	取る	動詞-一般	7	17	0.27%	0.73%	2.74
23	書く	動詞-一般	15	36	0.57%	1.54%	2.71
24	説明	名詞-普通名詞-サ変可能	12	26	0.45%	1.11%	2.45
25	頂く	動詞-非自立可能	10	20	0.38%	0.86%	2.26
26	其れ	代名詞	6	12	0.23%	0.51%	2.26
27	一	名詞-数詞	9	17	0.34%	0.73%	2.13
28	有る	動詞-非自立可能	55	101	2.08%	4.32%	2.07
29	多い	形容詞-一般	14	25	0.53%	1.07%	2.02
30	時	名詞-普通名詞-副詞可能	8	14	0.30%	0.60%	1.98
31	思う	動詞-一般	51	84	1.93%	3.59%	1.86
32	使う	動詞-一般	8	13	0.30%	0.56%	1.83
32	所	名詞-普通名詞-副詞可能	8	13	0.30%	0.56%	1.83
34	資料	名詞-普通名詞-一般	10	15	0.38%	0.64%	1.69
35	内容	名詞-普通名詞-一般	25	35	0.95%	1.50%	1.58
35	レポート-report	名詞-普通名詞-サ変可能	10	14	0.38%	0.60%	1.58
37	為る	動詞-非自立可能	142	197	5.38%	8.42%	1.57
38	授業	名詞-普通名詞-サ変可能	68	94	2.57%	4.02%	1.56
39	其の	連体詞	18	24	0.68%	1.03%	1.51
40	分かる	動詞-一般	46	60	1.74%	2.57%	1.47

・Q13のみに出現した語彙素

語彙素	品詞	Q12出現数(Ai)	Q13出現数(Bi)
欲しい	形容詞-非自立可能	0	79
もう	副詞	0	47
難しい	接尾辞-形容詞的	0	25
板書	名詞-普通名詞-サ変可能	0	25
スライド-slide	名詞-普通名詞-サ変可能	0	21
過ぎる	動詞-非自立可能	0	18
レジュメ-resume	名詞-普通名詞-一般	0	14
パワー-power	名詞-普通名詞-一般	0	13
早い	形容詞-一般	0	12

3. まとめ

① 「授業に関する学生アンケート」の実施率

例年、実施率向上を目指しているが本年度は対象教員 110 名に対して 104 名の教員が授業アンケートを実施した。実施率にして 94.55%という高い実施率を達成できており、来年度以降も継続してこの実施率を維持していきたい。

② 学生の回答率

アンケートの回答率は前期 21.33%、後期 10.74%、年間合計で 15.73%と非常に低い回答率となった。WEB を利用したアンケートの実施は紙媒体での実施に比べ回答率が低下することは想像に難くないが、それにしてもあまりに低い回答率だといえる。その原因としてはアンケートの実施に際しては授業内で時間を確保し、スマートフォン等を利用して教室内で回答させるよう各教員にお願いしているが、その手順が周知徹底できていないと思われる。また、アンケート実施期間についても最終授業週から定期試験期間の 2 週間と短く、授業内で実施させるチャンスも 1 度しかないことからスケジュールの見直しも来年度に向けた課題であろう。アンケート回答者の成績分布等からも分かるように学部全体として集計・分析を行うには十分なサンプル数と分布が得られているが、担当教員に個別にフィードバックしている授業ごとの集計結果は回答者数が二桁に届かない科目が多数ある状況である。個別の授業に対してもより有益なフィードバックをし、授業改善を促進するためにも次年度以降の回答率の向上への対応が必要である。

③ 学修時間の確保

中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて (2008)」や「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(2012)」では教育課程編成・実施の方針について単位制度の実質化が改善方策として謳われており、その改善方策の始点として学修時間の確保が明確に打ち出されている。しかしながら、今回の調査で単位あたりの適正な学修時間を確保していたと考えられる学生は 5.6%と少数であったことから、学部としても学修時間の確保に何らかの対策を講じる必要がある。

一方で本調査の結果から、多くの授業で〈一週間の学習時間〉は〈総合評点〉に対して無相関であり、一定数の授業では正負の強い相関があるという結果が得られた。これは学習時間を確保しても、多くの授業では成績評価が向上することはなく、むしろ特定の授業では授業外で勉強すると成績が下がってしまうという状況を示唆している。本学においてはシラバス作成要領に予習復習の内容を記すことを盛り込んでいるが、課題や予復習の指示方法あるいは参考書の示し方に対して、これまでよりも一層の注意を向ける必要があるのではないだろうか。しっかりと学習をした学生には、その成果として〈総合評点〉が向上するような授業運営・学生指導を目指していかなければならない。

また、以上の指摘は「成績評価の平準化」に対しても重要な示唆を含んでいると思われる。

本学でも GPA 制度が導入され大学での学業成績が、奨学金や留学、就職といった学生の将来を左右する事項に影響を及ぼす可能性がある。真摯に学習に取り組んだ学生が、その結果として十分に授業内容を理解することができ、しっかりと成績評価 (=インセンティブ) に繋がるという、学士課程カリキュラムとしての望ましい形を目指していかなければならない。今回の調査は専任教員の一部の授業だけを対象に実施した結果であるが、学部だけではなく大学全体として成績評価の現状をしっかりと調査し、本来的な意味での「成績評価基準の平準化」に向けた議論を進めていくことが重要である。

④ 特徴的な学生のタイプ

主成分分析の結果から、先行研究 (八木 2004) ⁽¹⁾でも指摘されていた授業に出席し自主的な学修もしているが授業に不満を持っている、あるいは授業の内容が理解できていないまま授業にでているコンフォーマリズム的な状態の学生や授業に出席はするが自主的な学習をせず授業内容の理解が進んでいないストレイシーブ型の学生が存在する可能性が示された。特に前者のコンフォーマリズム的な状態の学生は、一見すれば熱心に勉学に取り組んでいるが潜在的に授業への不満や興味・関心の低下があると思われるため注意が必要である。

⑤ 学生からの授業改善に関する要望

自由記述回答からレジュメやスライド、板書、教室といったワードが多く見られたことから、これらの事柄について対応が必要である。講義資料の適切な提示方法は科目特性によっても異なるが、学生の学修ニーズを把握し学修意欲を削がないよう対応することが求められる。また、教室環境については、現在、全学で慢性的な教室不足の状態が続いている。新校舎の建設や教育体制の変更などを踏まえると、今後改善される見通しは少しずつ見えてはきているが、今すぐにこの問題が解消されるわけではない。授業教室の調整・配置は履修者が全員着席できる状態をつくることが最優先の事項であるため、教室のロケーションや設備等について必ずしも担当教員の希望通りに行かない場合も多い。このような場合、ポータブルの視聴覚装置の活用や TA・SA 配置などの各種サポート制度を利用して、より効果的な授業運営を行うことが望まれる。

4. 参考文献

- (1)八木紀一郎. (2004). 学生による授業評価データの分析と解釈. *京都大学高等教育研究*, 10, 59-66.
- (2)清水裕士, 村山綾, & 大坊郁夫. (2006). 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析 (1): コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用 (コミュニケーションデザイン及び一般). *電子情報通信学会技術研究報告. HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎*, 106(146), 1-6.
- (3) 松河秀哉 (2012). 共通教育賞と授業評価アンケートの関係の分析を通じた 「優れた授業」を規定する要因の検討. *大阪大学高等教育研究= Osaka University higher education studies*, (1), 9-24.